

---

# ある恋心?

リム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある恋心？

### 【Nコード】

N9931T

### 【作者名】

リム

### 【あらすじ】

主人公は、大学での人間関係に疲れ喫茶店で時間をつぶす日々を送っている。

半同棲中の彼氏にも打ち明けることができないまま…

世界は美しくも優しくもない。いつの間に、私はそれに気付いてしまったのだろう。

「ひまずぐるわ……」

喫茶店の窓際の席で、空を見上げてひとりごちる。もちろんこの現代、やるべきことがない人間なんてそうそういない。大学生はモラトリアムなんて言われるけど、授業に出なければ単位はもらえないし、研究しないと卒業できない。就活だって、厳しい世の中だ。

さて、そんな中私はカフェオレを飲みながら何をしているのか？素直に認めれば「絶賛現実逃避中」だった。

やるべきことをすべて放棄したのは、かれこれ1ヶ月前だろうか。研究室もサークルも一緒に、親友だと思っていた女の子が私の悪口（正確に言うと、私が色んな人の悪口を言っていたという話）を広げていて、いつの間にかすっかり居場所がなくなっていたのだ。

それに気づいたとき、裏切られたショックもあって、すっかり頑張る気をなくしてしまった。しかし、半同棲中の彼氏にはそのことが言えず、毎朝学校に行く振りをして近所の喫茶店でぼうつとするのが日課になっていたのだった。

彼氏に打ち明けて、何だったなら泣いて慰めてもらうことだっってきたはずだが、それをしなかったのは、ちよつとの見栄と、女の子の複雑繊細な世界のことなんかわからないだろうと思ったのと、それから、単純に何だかめんどくさかったのがある。

付き合って三年目。よく言えば気心が知れてくるが、「何でこの人と一緒にいるんだっけ？」という必然性が見えなくなってきたこの頃。半同棲を始めて、その傾向は益々強くなった。「（一応）会いたいから会う」から「帰るとい存在」になったせいだろうか。会話も、以心伝心と言えば聞こえが良いが、必要最低限のやり取り

と当たり障りのない愚痴になる。「居心地はいいんだけど、深い話はめんどくさい。」という気持ちにひきずられ、いつかは言わなきゃと思いつながらずる引延ばしていた。

「いつまでもこうしてるわけにはいかないってわかってるんだけどなあ……」

冷めてきたカフェオレをすすりながら、何度目いや、何十回目になる迷いを口にする。

「何してるの？」

突然、聞き覚えのある声に強い調子で声をかけられ、飛び上がる。彼だ。やばい、みつかった。目を合わせられずに、顔を伏せる。

「最近、どうも変だと思って、心当たりにあたってみたんだ。やっぱりここにいた。学校もサークルも行ってないらしいな。」

怒られる。体が緊張で強ばる。

「でも……」

思いがけず柔らかい彼の調子に、思わず顔を上げる。

「お前のことだから、理由もなくさぼった訳じゃないんだろ。どうした？」

怒るというより心配そうな顔をした彼がそこにいた。恐る恐る口を開く。

「…… A 子にはめられてみんなにも嫌われて……」

断片的に口にしたただけなのに、どつと涙が溢れてきた。

ああ、私、傷ついていたんだなあ。救いの手を、ずっと待っていたんだなあ。そんな当たり前のことに初めて気付いた。

喫茶店で泣きじゃくるのも何だから、と家に連れて帰られる。今日は彼も、学校を休んでくれたらしい。

「一応事情はわかった。でも何ですぐ投げ出したんだ？あることないこと言われたんだろ？説明すればわかってくれる人だっていたはずだ。」

少し元気を取り戻していた私は、言い返す。

「何にもわかってないよ！女の子の関係って複雑で繊細なんだから……。A子の影響力の大きさとか……」

彼は小さい子をあやすような顔をする。

「でも、俺が話を聞きに行ったサークルや研究室の人は心配していたぞ。急に顔を見せなくなっただって。」

だからそれが本心かどうかわからないのが、女の子なんだってば……。と言いかけて気付く。

「わざわざ話聞きに行ったの？何人にも？」

「ああ、顔を見て話さないとわからないことも多いと思ってな。お前は、どうせ誰もわかってくれないって思い込んでないか？顔を突き合わせて、お互いの気持ち伝えながら話せば、わかってくれる人はいると思うぞ。」

私は口ごもった。的を射たことを言われたからではなく、人見知りなはずの彼が、そこまでしたことに驚いたからだ。

「それからなあ……」

声にちよつと呆れたような響きが混じる。

「何で俺にすぐ相談しなかった。何のために一緒に住んでるんだ？」

「だって……いつも忙しそうで疲れてたし、私のワケわかんない愚痴なんて聞いても……」

思わず目をそらす私の頭に手を乗せ、真剣な顔で言う。

「いくら忙しくても、大事な話は聞く。だから、隠し事はするな。」

忙しいときにホントに私の話じっくり聞くわけ？とはもう聞けなかった。

夜。

隣で、ひげ面の大男が寝返りを打つ。前髪も、目にかかるくらい伸びている。

「むさくるしいから切れって言ってるのに……」

そう思いながら、何となく寝顔を眺める。昼間とは違う無防備な顔。

ひげも前髪も、神経質な彼が人避けて伸ばしていることを知っている。

「かわいい…」

思いがけずぼわっと心に何かが灯った気がして戸惑った。何だこれは？何だか随分忘れていたような…

ああ、これが恋か。

気恥ずかしい結論に達する。

でもこの気持ちをどうしたらいいのだろうか？

素直に言葉にしても、冗談だと思われるのが落ちだ。何より、言葉にしてしまったら何かが違ってしまふ気がする。でも朝起きたら忘れてしまふのも、もう嫌だ。

言葉の端々で、日常に埋もれてしまった何気ないキスで、寝起きの悪いこいつのために淹れてあげる一杯のコーヒーで、伝えられるだろうか。

何より、私が一步を踏み出す姿で、君の後押しがあったからだよと伝えられるだろうか。

できるかな…。でも、できなかったらまたここに帰ってきてやり直そう。

好きな人の横で眠れるという、ささやかな幸せの場から。美しくも優しくもない世界へ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9931t/>

---

ある恋心？

2011年10月9日07時52分発行